

『このミステリーがすごい！』大賞受賞作

がん研究者が描く 本格医療ミステリー

『がん消滅の罠 完全寛解の謎』書店で続々ランキング1位！

株式会社宝島社(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:蓮見清一)は第15回『このミステリーがすごい！』大賞・大賞受賞作品『がん消滅の罠 完全寛解の謎』が、書店で続々ランキング1位になり、Amazonでも4.7点(5点満点)と、大変好評です。

『このミステリーがすごい！』大賞は宝島社が主催するミステリー＆エンターテインメント作家の発掘・育成を目指す新人賞で、これまでにも直木賞受賞の東山彰良氏や、日本推理作家協会賞受賞の柚月裕子氏、累計1000万部突破の『チーム・バチスタの栄光』シリーズの海堂尊氏などの作家を輩出してきました。

今受賞作の著者、岩木一麻氏は国立がん研究センターや放射線医学総合研究所などで研究に従事した経歴をもつ、がんの研究者です。本作は著者自身が研究の中で感じた、人の死後にも増殖し続けるがん細胞への“恐怖心”から着想を得て描かれたミステリーです。

〈余命宣告された末期がん患者たちが、保険会社から多額の生前給付金を受け取った後、治療不可能なはずのがんが完全に消滅する〉本作では、そんな前代未聞でありながら実現可能なトリックを核に研究者ならではの圧倒的なディテールで描かれている点が高く評価され、今回の受賞につながりました。

今日の医療現場が抱える問題を背景に、医師やがん研究者、保険関係者など多数の登場人物を巻き込んで展開していく本作は、ミステリー好きの方だけでなく医療エンターテインメントが好きな方や医療関係者の方々にも楽しんでいただける作品です。

著者のインタビュー取材も可能ですので、ぜひご検討をいただけますと幸いです。

『このミステリーがすごい！』大賞では、これからも新しい作家・作品を発掘・育成し、業界の活性化に寄与したいと考えております。

『実在の病気を使って、こんなに大胆不敵な(実現可能な)大トリックを仕掛けたのはミステリー史上初。医療ミステリーの新しい歴史がここから始まる』

大森望氏(翻訳家・評論家)



【あらすじ】

余命半年の宣告を受けたがん患者が、生命保険の生前給付金を受け取ると、その直後、患者の病巣がきれいに消え去ってしまう。連続する奇妙ながん消失事件に医師とがん研究者のコンビが挑む！

『がん消滅の罠
完全寛解の謎』
発売日:2017年1月12日
定価:本体1380円+税

書店ランキングで続々1位！

■有隣堂チェーン(文芸書・ミステリー)	第1位	(※1)
■三省堂書店有楽町店(文芸)	第1位	(※2)
■三省堂書店神保町店(文芸)	第1位	(※2)
■紀伊國屋書店新宿本店(文学・芸術)	第1位	(※2)
■紀伊國屋書店梅田本店(文学・男性作家)	第1位	(※2)
■芳林堂書店高田馬場店(文芸書)	第1位	(※2)

(※1) 2016年1月8日～1月14日 (※2) 2016年1月9日～1月15日



今は、がんと共に生きる時代です。医療の進歩で長期間の延命は珍しいものではなくなり、亡くなる直前まで日常生活を送ることが可能になります。しかし、がんに关心を持つ人は多いとは言えず、無理解や偏見などにより、がんと共に生きる人たちが苦悩する様子に心を痛めてきました。がんという病気そのものをミステリーの核として描えることで、多くの人にがんに关心を持ってもらいたい、がんという病気を苦で受け止められる社会に少しでも近づかせたい。そう願って執筆を行いました。幸い、多くの読者から「読みやすかった」「勉強になった」と言って頂き、感動しています。

岩木一麻(いわき・かずま)

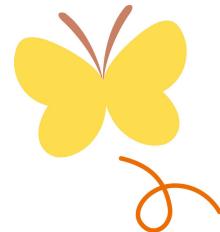
1976年3月生まれ。埼玉県出身、千葉県在住。神戸大学大学院自然科学研究科分子集合科学専攻修了。国立がん研究センター、放射線医学総合研究所で研究に従事。現在、医療系出版社に勤務。趣味は釣り。大物が連れると居酒屋に直行し、刺身や塩焼き煮物に調理してもらい、お店のみんなでいただくのが一番のリラックス法。

虫の研究から癌研究員に！ 『このミス』大賞作家・岩木一麻

聞き手・ライター：大西展子

【虫の研究をきっかけに癌研究員に！】

学生時代は農学部で昆虫の研究をしていました。昆虫が特別好きというわけではなかったのですが、彼らの人間とはまったく違う生存戦略に大きな魅力を感じていました。大学院卒業後も昆虫の研究をしていましたが、**国立がん研究センターでモンシロチョウから見つかった抗がんタンパク質の研究ができる人を探しているという話を聞いて応募したところ、採用して頂くことができました。モンシロチョウが昆虫研究とがん研究を橋渡してくれなければ、今回の作品が生まれることはなかったと思います。**その後、放射線医学総合研究所で放射線発がんの研究に従事しました。作品にはがん研究を通して得た知識や、感じたことを沢山盛り込んでいます。



【埼玉出身！千葉在住！家系は医療畠！？】

会社員の父と看護師の母の間に3人きょうだいの長男として生まれました。弟は獣医師で、筑波にある研究所で研究員をやっています。妹も薬剤師ですし、父も理系の人なので家族全員が理科系なんです。同居していた祖父は医者で薬剤師だった祖母と自宅の敷地に小さい診療所を開業して2人で切り盛りしていました。親戚にも医者が多くて、本家は今も病院を経営しています。そういう家系でしたから、両親は1人でも医者になってくれれば、と思っていたんじゃないかな。私たちきょうだいもそんな両親の無言のメッセージを受信していました。でも、一度も医者になれとは言われなくて、むしろ「好きなことをしていいんだよ」と言ってくれていたのでありがたかったです。

【『このミス』応募のきっかけ…読みどころは!?】

子供時代から人並みに本は読んでいましたけど、小説みたいなものは書いたことはありませんでした。**いろいろな研究をしたり論文を読んでもいる中で、こういう技術を使うとこんな恐ろしいことができるんだ、これは治療のために使っているけど悪用するのも簡単だよなって感じで小説のアイデアがいくつも思い浮かびました。**私は気が小さいので夢の技術であっても悪用されるのではないかと心配になってくるんですね。でもその反面、こういうことを小説に書けば面白いんじゃないかと漠然と思ったりもするわけです。夜の研究室で1人でがん細胞を培養したりしているとふと恐怖を感じたりもします。その人は亡くなっているのに癌細胞として生きながらえているですから。そういう経験にイマジネーションを掻き立てられたりしながら、ミステリーの根幹をなすトリックを、現実実行可能な犯罪として思いついた時に、こういうことを世の中の人たちにもミステリー小説の枠の中で知ってもらえたらいんじゃないかなと思ったんです。読みどころは、普通は殺人事件が物語を動かす軸になるとが多いと思うんですけど、この作品は従来のミステリーではほとんど扱われなかった、癌によって死ぬはずの人が死がない、という謎を主軸に置いています。癌という手強い病を相手にする人たちの人間模様も含めて、ミステリー好きな人たちに楽しんでもらえると思います。

【現在は医療系出版社勤務！気になる今後の活動は…!?】

今は医療系の出版社に勤めています。世界中から薬剤に関する情報を集めて整理する仕事をしています。もともと情報を扱うのが好きな私にはピッタリな仕事です。しかも、**最新の医学情報とか、薬学や化学情報にも常に接する仕事**なので、私のような小説を書いている人間にとってはとても恵まれている職場だと思います。**次回は感染症を扱い、バイオテロの作品を書きたい**と考えています。私は叙述トリックのものが好きで、そういう小説は読んでいてもどこで間違えちゃったんだろうと必ず読み返してしまうんです。最後に世界が引っ繰り返ってしまうというのが本当にすごい。そんな**叙述トリックに憧れがあるので人が騙されたり、驚かせる作品をこれからも書いていきたい**と思っています。

【趣味は釣り！江戸川で大物を釣り上げる!?】



私の住んでいる市川市の行徳は旧江戸川が近くに流れているんですけど、海が近いので川魚も海の魚も両方釣れるんです。基本的に夜釣りです。釣れない日も多いんですけど、時には大きなスズキが釣れたりするんですよ。私は1匹釣れたら終了で、行きつけの居酒屋に活かしたまま運んで刺身や塩焼き、煮物に調理してもらいます。大きな魚は一人じゃ食べ切れないでお店にいるみんなで食べるんですけど、こんな時が一番リラックスできますね。